

「星」と「蛍」 : アフリカの森で見たゲ レム

安岡, 宏和 / YASUOKA, Hirokazu

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

14

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

195

(終了ページ / End Page)

198

(発行年 / Year)

2014-03

「星」と「蛍」

— アフリカの森で見たゲレム —

安岡 宏和

1

古来人びとは星空に関心をしめしてきた。東洋では七夕の夜に織姫と彦星が出会い、ギリシアではさまざまな神話が星座に託された。エジプトではシリウスを見てナイルの洪水を予期し、ポリネシアの人びとは星空を羅針盤がわりに海を渡ったという。

空気の澄んだ山村に生まれた私は夜空を眺めるのが好きだった。星たちの一生とくらべれば人間の歴史なんてちっぽけなものだ。古代の人びとも私とおなじこの星空を眺めていたに違いない。そう考えるとなんだか不思議な気分になったものだ。しぜんいろいろな星や星座を覚えていた。

天空に巨大な図形をかたちづくる星たちの名はどれも魅力的だった。とりわけ私の気をひいたのは夜空で二番目に明るい恒星だ。カノープス。神秘的な響きをもつこの星は日本では南の水平線にすこし顔を出すだけだという。ざんねんながら山間にある私の故郷から見ることはできなかった。

2

大学院に進学した私はフィールドワークをするためアフリカへ行くことになった。ようやくカノープスを見ることができる。しかし見たことのない星を探すのは案外むずかしい。どこか雰囲気の違い、異国の空ではなおさらだ。日本で見るよりずいぶん高いところにオリオン座を確認したときはほっとしたものだ。

私がフィールドワークを通してつきあってきたのはバカ・ピグミーとよばれる人たちだ。古代ギリシアの伝説にちなんで「ピグミー」と名づけられた諸民族は熱帯雨林のひろがるコンゴ盆地のあちこちに分散している。カメルーン東南部の森に住んでいるバカはそのなかでもよく知られた民族だ。

近隣の農耕民族とくらべてピグミーたちの背丈は低く、肌の色がすこし薄い。遺伝的には数万年前すでに幾つかの集団に分岐していたという。とはいえ狩猟採集につよく依存する生活やポリフォニーとして名高い合唱など文化的な共通点もたくさんある。

3

自然と深く関わりながら生きる人びとは誰もがみな自然について豊かな知識を身につけている。熱帯雨林の数えきれない植物のなかでバカたちの知らないものはほとんどない。ちょうど私たちが昆虫少年や天文少年として目覚める年ごろだろうか。子供たちは森にある木や蔓をつぎつぎと覚えていく。

あるとき私はバカたちに星空の話振ってみた。ところが彼らには星空にたいする関心がないようだった。星や星座に名前がないだけではない。バカ語の語彙に「星」という単語がないのだ。日本語でいう「星」と「蛍」をひとまとめにしてゲレムと呼ぶのである。

空のゲレムと地面のゲレムという区別はちゃんとつけられる。知覚のうえでは「星」と「蛍」をおなじものと認識しているわけではないようだ。夜に小さな光を放つほか共通点がないのだから当然だ。いったいどうしてバカたちは天体と昆虫を一緒くたにしてしまったのか。

4

私がゲレムを見たのはバカたちと森のなかにいるときだった。フィールドワークをはじめて数か月経ったある日のこと。家のまえて植物標本を整理していると年配の男がやってきた。これからみんなで森に行くのだがおまえの仕事は森でもできるのか。もちろん私は一緒に行くことにした。

バカたちはその日その日の食料を探しながら森を歩いていく。私のまえを歩く女がふと足をとめ何かをつまみあげた。乾燥して筒状に丸まった枯葉だ。ヤマノイモの葉だという。あたりには枯れた蔓もおちていた。地中の芋が大きくなっている証拠だ。女たちは干からびて切れ切れになった蔓をたどっていく。

一行はゆっくりとヤマノイモの群生する森の奥地へと向かっていた。乳飲み子を抱えた女たちは家財道具をいれた大きな籠を背負っている。斧を肩にかけた男たちはときおり立ちどまっては樹上に目を凝らし蜂の巣を探している。先を急ぐことはない。森のなかで食事に困ることはないのだ。

5

ある日の午後のこと。男たちがカワイノシシを追って行った。森の夕暮れは早い。彼らが合流したときにはもう薄暗くなっていた。今夜はこのあたりで寝るようだ。女たちがモングルをつくりはじめた。細い木や蔓を格子状に組んでクズウコンの大きな葉をひっかけた半球形の小屋である。

男だけの泊まりのときはモングルではなく片流れの屋根を葺いた寝床をつくる。この森行きで私は毎度そのような寝床をつくってもらい少年たちと一緒に寝ていた。だが今夜はもう遅い。さいわい雨の心配はなさそうだ。私はそのまま寝ることにした。どうせ明日はまた移動するのだ。

私は塵をひいて仰向けに寝ころがった。陽の落ちた森のなかで私たちは闇につままれていた。大小さまざまな樹木がキャンプに覆いかぶさっている。薄墨色の夜空は木々の黒い影のあいだに割れたガラス片のように不規則に散らばっていた。そのひとつに星が小さく輝いていた。

6

すこし頭を動かすと星は枝葉の影に隠れてしまった。そうか。私は立ちあがってぐると頭上を見まわした。幾つかの夜空のかけらに「星」が見えている。私が一歩ふみだすと「星」たちはそこから姿を消した。こんどは別の場所から顔を覗かせている。私は空を見あげながら二歩三歩と足をふみだした。

私の歩くリズムにあわせて白い光があちこちで明滅しはじめた。
まるで蛍の光のように。

筆者紹介

田中 勉

法政大学人間環境学部教授

鈴木 滋

法政大学大学院公共政策研究科博士課程

板橋 美也

法政大学人間環境学部専任講師

日原 傳

法政大学人間環境学部教授

平野井 ちえ子

法政大学人間環境学部教授

渡邊 誠

法政大学人間環境学部教授

高田 雅之

法政大学人間環境学部教授

杉戸 信彦

法政大学人間環境学部専任講師

安岡 宏和

法政大学人間環境学部准教授